

第2回日野市子ども・子育て支援会議（要約）

出席委員 19人中2人出席

欠席委員 福田委員

松本委員

日 時 平成26年9月30日（水） 18:30～20:30

場 所 市役所5階 505会議室

次 第

1 開会

2 会長あいさつ

3 議事

(1) ニーズ調査から見てきたことについて

(2) (仮称)新ひのっ子すくすくプランの素案について

(3) その他

4 閉会

事務局	1 開会
事務局	傍聴者なし
事務局	2 資料確認 会議次第 資料1 子ども・子育て支援計画（新！すくすく）策定に向けたニーズ調査結果から 資料2 (仮称)新！ひのっ子すくすくプラン骨子案 資料3 (仮称)新！ひのっ子すくすくプラン素案（抜粋版） 前回会議（7月30日）の議事録 子ども・子育て支援新制度なるほどBOOK（9月改訂版）
会長	会長あいさつ
会長	議事に入る。以前、アンケートを取り、行政側で検討し、特徴点を挙げたものが資料1になる。〇〇部長から説明がある。
〇〇部長	・1つ目のグラフだが、子育ての楽しさと辛さという就学前児童の保護者を対象とした調査数値。「楽しいですか」「辛いですか」というプリミティブな質問。前回調査と比べ、改善し、楽しいと感じている方が増加している。これは、日野市の合計特殊出生率の増加の裏付けとなる。親にとっての子育ての価値を表す指標になる。子育ての社会的な価値も反映している。子育ての価値が、社会的に認知されて初めて、子育ての当事者である父母の反射的な影響として、子育ての現状

の背景につながっていく。また、「楽しいと感じることの方が多い」が 64.5%から 68.5%になっているが、「辛いと感じることの方が多い」については、2.7%が 2.8%と若干増加もしくは変わらないくらい。

・次に 2 番目のグラフ。「辛いと感じることの方が多い」について、出産後、0 歳の時は 3.4%だが、1 歳で 0.8%、2 歳 4.6%、3 歳 4.8%と少し増加している。幼稚園に入園する年齢で、辛いと感じることが多い子育て世帯層へのフォローもしたいと思っている。このアンケート調査は、今後も継続し、経過を追っていききたい。

・3 番目と 4 番目のグラフは、母親の就労希望について尋ねている。単純に就労したい数値が出ているかと思ったが、予想とは若干異なっていた。「子育てや家事などに専念したい」が、12.9%から 21.3%に増加している。また、「すぐにも、もしくは 1 年以内に就労したい」は、24.3%から 20.6%に減少している。各家庭の経済状況や、働きたくても働けない状況等、様々な要因が影響するは思う。

・個人的には、数値は「1 年より先で末子の成長後に就労したい」がもう少し増加しているのではないかと、予想していたが、そうでもなかった。我々自治体や国は、労働力不足のため、仕事して欲しいと駆り立てる側面もある一方で、在宅での子育てニーズもあることを忘れてはいけないと思った。

・4 番目のグラフ。0 歳 1 歳児の母親は、「子育てや家事などに専念したい」「1 年より先で末子の成長後に就労したい」という意見もあった。中学生向け調査で自己肯定感について尋ねている。「自分のことが好きである」「自分は愛されていると感じる」という設問だが、前々回も含め、全体としては改善傾向にあるのではないか。自己肯定感を切り口にした学校でのアプローチの成果ではないか。ここでも全体的な数値は改善していると思う一方で、「自分のことが好きである」に「まったくあてはまらない」という子どもが 7.9%から 7.8%、9.6%に増加している。

・また「自分は愛されていると感じる」も同様の傾向が伺える。下の 2 グラフは、いじめに関する設問。「人をいじめたり無視したことはあるか」は他人に対するいじめだが、「ない」の回答はご覧の通り 53%から 64.9%に増加している。また「誰かにいじめられたり無視されたことはあるか」は自分に対するいじめだが、こちらも「ない」の回答は、69.5%から 71.2%と若干増加している。両グラフとも「ある」という回答はそれぞれ減少し、改善されている。

・具体的に、「自分がいじめられている」「誰かにいじめられたり無視されたことはあるか」について「よくある」は、平成 16 年 1.2%、平成 21 年 1.4%、今回の平成 25 年の結果は、1.9%と全体としては非常に良い傾向になっているが、一方個別の事象はある。全体とは別に、個別アプローチは必要。

・P 3 では、未就学時の保護者に「親子でつきあえる友人の有無」「子どもができて働き続けたい女性の割合」について尋ねた。対象は共に 20 代～30 代だ。採り挙げたのは「新！ひのっすくすくプラン」の上位計画、日野市の基本計画

	<p>の1項目で、「子ども輝くまちをめざす」という目標の指標になっているから。「気軽におしゃべりできる子育て仲間がいる」と回答した人は、2010年のプランでは、目標が80%になっているが、これはほぼ変化はない。我々は前計画や前々計画でも「子育てを孤立させない」「仲間を作る」ことに取り組む宣言をし、取り組み続けてきたつもりだが、大きな数値の変化はなかった。計画を改める必要があるかもしれない。もしくは目標値が高すぎたせいかもしれない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2つ目のグラフだが、同様に2020プランの指標だが、「子どもができて働き続けたい」女性の想いを受け止められるような施策展開としてのべられたと思うが、目標値に対して芳しくない。必ず働き続けたい方と、ペースを落としてでも働き続けたい方の合計の目標値を80%にしたが、結果は65%となり、若干の改善傾向にあると言える。 ・さらに下の2グラフについてだが、次世代の子育てについて20代~30代に尋ねている。少子化対応としては、好ましくない結果になった。「結婚について」の問いに対して、「結婚するつもりはない」が16.2%から19.6%に増加した。また「子供を持ちたいと思うか」という問いに対しては、「持ちたいと思わない」が15.9%から16.0%と、改善しているとは到底言えない。この設問は個々人の選択の問題でもあるので、大変回答しづらいと思う。これらの回答から見えてくる問題を、私たちが考えなければいけない。本日の議題の中で、この計画の骨子の基本目標に「子育ての豊かさ」がある。私の感じたところも参考にさせていただき、それぞれの思いをお話いただきたい。
委員の主な質問・ご意見等	
<ul style="list-style-type: none"> ・小学生は元気に学校に来ている。日野市の施策が良いからではないか。行きやすい。居場所がある。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・高校生向けニーズ調査について。「自分のことが好きだ」という設問だが、中学生に比べて低下している。平成25年度、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」合わせて64.9%となっている。平成16年は「だいたいあてはまる」が40.9%、「とてもあてはまる」が15.2%、合わせて56.1%だったので、中学生の比較では増えているが、高校生になると愛されている実感がなくなっている。 	
<p>→高校生は、世代的なものではないか。私が高校生の時、自分が好きだったか聞かれたら同じように答えたと思う。説明は難しいが、過去に同様の設問があれば、動きを見てみたい。</p>	
<p>→中学生から高校生になる発達の過程で、ある意味で鋭い自己分析をしていく。今は少し低年齢化する傾向にあるのではないか。様々な要因が反映されると思うが、高校生になると、進学や将来の希望等、自己に向き合う問題が出てくる。それが自己嫌悪につながるのではないか。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・思春期の心理は色々関係すると思う。いつまでも自分大好きとは考えられない。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・自己肯定観のアンケートに通じるが、自信があるかないかという内省的な問題とやりた 	

いことが見つかるか、生活する収入が得られるかという社会的な問題は、現代の世相を表している。平成16年のアンケートであれば、少し異なるのではないか。将来の見通しがつかないことの表れではないか。市だけで解決するのは難しい。大きな目で見ていく必要がある。

・9月に我々の団体で講演会を開催した。30年程前に、プレーパークという自由な遊び場を作るNPO法人日本冒険遊び場協会を始めたプレイリーダー・〇〇さんが、脳科学の観点から遊びを捉え、なぜ日本人の若者の自己肯定観が低いのかについて話をした。中学生・高校生になって、急に自己肯定観が強まるものではない。自己は過程の連続で形成される。小さい頃から親や周囲の大人たちにどれほど受容、受け入れてもらってきたかが非常に大切だ。人間は幼少期が最も弱い時期で、周囲の大人たちに守ってもらい、可愛がってもらわなければ生きられない。本能的に好かれようとする。親が喜ぶことをしようとする。親だけでなく、学校の先生に対しても同様だが、自分を受け入れ、気に入ってもらえることをやろうとしてしまう。自分がやりたいことをやれず、自分がないまま大きくなり、中学生や高校生になって、自分って何だろうと気づき始める。自分が見えなくなると、自己肯定観がなくなる。もちろん、それが全てではないが、遊ぶという能動的な行為を通じて、自分が楽しんでいることを喜んでもらえると、受容されていると感ずることができる。中高生への直接的なアプローチも大切だが、自己形成期である幼少期、自己肯定観が育まれる大切な時期に、どれだけ抑圧がなく、遊べる環境があるかどうか、結果に大きく影響するという話があった。とても勉強になった。

・高校生の自己肯定観の設問に対して、過去に同様の設問があったかどうかという話だが、傾向として中高生は前回調査よりも今回の方が改善している。今、正確な数値が手元にないが、中学生と同様に高校生の設定値も上がっている。

・上がっているのは良いことだ。日野市は、何か良い施策が利いているのかもしれない。ただ日野市だけの問題でなく、日本が世界に比べて依然として自己肯定観が低い背景を述べた。

・日野市においてはかなり改善されている。一方で、確かに日本全体として見た時、青年、高校生、18歳前後の世代が落ち込んでいる。大人のあり方が関係してくるのではないかと。親や周囲から変えていってほしい。

・息子（上のお兄ちゃん）が今年、中1になった。親離れをしておらず、未だに一緒にお風呂に入っているほど、ママっ子だ。委員をさせていただいているのもあり、「自分のことが好きである」「自分は愛されていると感じる」かについて、軽く投げかけてみた。返ってきた答えは、私の思っていたイメージと違っていた。自分のことはそこそこ好きだというが、自分が愛されているかについては、自分より妹（下の娘）の方が愛されていると思っていたと言う。妹は7歳離れており、息子は一人っ子だった期間が長かった。両親や祖父母の愛を一身に受けていたが、妹が生まれた途端、「お兄ちゃんでしょう。もう自分でできるよね」と言われ、こちらはそんなつもりはないが、何も考えていないようで、疎外感を感じていた。私はむしろ、口達者でイラっとさせる娘より息子の方が好きなのだが。娘を

抱いている時、息子に「あなたは7年間抱っこしてきたんだから、もういいでしょう」と言うと、「俺はその時のことを覚えていない」と言う。肝心なのは、小さい時にいかに接してきたか。私たちの育て方や接し方が良くなかったのかもしれない。最近、そんなことを考えた。

・「自分のことが好きである」「自分は愛されていると感じる」の設問に対して「とてもあてはまる」という回答が少しずつでも上昇していて、良かった。今、6歳と3歳の子どもがいるが、彼らが中学生になったらどうなのかと考えた。普通、中学生が「自分のことが好きである」とか「自分は愛されていると感じる」かについてあまり考えないと思う。また、ニュースや新聞等の報道を見て、いじめが非常に多いと思っていたが、「人をいじめたり無視したりしたことはあるか」「いじめられたり無視されたりしたことはあるか」という設問で「ない」とはっきり答えられる子が多く、希望が持てた。

・P1「母親の就労希望」について。私自身働いていることもあり、働き方も含めてもっと色々な女性の生き方があり、今後増えていく。まず分母の数が気になった。また、この設問は就労していない人を対象としているが、既に就労している人は過去に比べ、多いのではないか。うちには、中1と小3の子どもがおり、下の子が1歳の時に日野市に引っ越してきた。引越後しばらく経ってから、保育園の先生と個人面談があった。下の子は、まだ1歳か2歳だったが、「とても良い保育園で育ててこられたのですね。とても大事にされてきたのが良くわかる」と言われた。それは箱入り娘のように育てられたという意味ではなく、自分の感情を出していいんだとか、人に受け入れられてきたことが見ればわかるという。立ち居振る舞い等、小さい頃から確実に身につけ、自分自身の中で根づいていくものだと思った。小さい時に不安があるが生きていけるという絶対的な安心感を得ることが大切のだと感じた。中1の兄がとてもやんちゃで、小学生の時に色々なトラブルがあった。「僕なんかいなきゃいいんだ」と考えた時も多々あったと思うが、小学校の先生がとても心を砕いて良く見てくださり、自信が付き、達成感を得られるような役割を与えてくださった。環境はとても大切だと思った。

・うちにも小5の娘と中2の娘がおり、中学生に対する「自分が愛されていると感じるか」という設問に少しドキっとした。女の子2人なので、上の娘は結構厳しく育ててしまった。下の娘の時は、気持ち的にも余裕を持って子育てができ、おおらかに育てられた。それが今、現れてきている。もし「自分が愛されていると感じるか」と上の娘に聞いたら、多分「愛されていない」と答えるのではないか。そのことに、私自身も気づいており、直していきたいとは思っているが、つきつくあたってしまう。性格が自分似なので、自分を見ているような気になって、厳しくしてしまうのかもしれない。下の娘は小5だが、今も3歳ぐらいのような、可愛らしいままの気がして、そちらに愛情が向いてしまう。ずっと悩んでいるが、なかなか難しい。上の娘がバレエ部に入っているが、最近、練習をとてものがんばっていて「試合を見に来て欲しい」と言う。中学生になると、授業参観も来ないでという家庭が多いようだが、娘は来てほしいと言うので観に行くととても喜ぶ。これから少しずつでも愛していることを伝えていきたい。

・子どもができて働き続けたい女性の割合。おそらく、平成 21 年度に比べ、増えていることを想定して設問を設定したのではないか。これが予想と異なった。分母数を重視したい。就労の状況が厳しいのか、最初から諦めていて家事に専念するのか、きちんと比較した上で、分析する必要がある。もっと大きく増加しているかと思ったが、そうでもなかった。ただ、子ども・子育て支援は子育て支援であって、親の就労を全面的に支援する就労支援ではない。我々は就労支援するために、集まっているのではないということをお互い認識した上で、話し合いを進めていきたい。

・安部内閣の女性の推進計画と異なり、とても良い話だと思う。働きたくない女性を無理に働かせる必要はない。今の男性のように、助力がなければ働けない残業が多い就労スタイルには反対だ。社会の中で働くこと、そして働くことに喜びを見いだすことは重要だ。ただ、男女ともに、働き過ぎで子どもに負担がかかる日本人の就労スタイルは良いものではないと感じる。また、子どもの自己肯定観は、小さな頃から育まれるというのは、その通りだ。今の中高生は、自分が愛されていると感じることができず、自己肯定観が持てないという。彼らがどうしたらいいか、我々は考えていかなければならない。自己肯定観はアイデンティティの問題なので、人によって様々。ある人は哲学や文学的な意味で捉えているので、簡単なことではないが、普段の学習の中で、競争社会の中で、部活の中で、達成感が得られない子もいるのではないか。そこで力を発揮できなくても、ボランティア活動等、地域社会の中で能力を発揮し、仕事を通じて達成感を獲得することで、自己肯定観を得ることができるのではないか。そういう意味で子どもたちを学校だけではなく、違う場で社会参加をさせること、周囲の人々が進めていったら良いのではないか。

→母親の就労希望について、補足する。働きたい女性の数は予想に反していたが、アンケートの中で実際に希望する職や形態についての問いがある。具体的には 4～6 時間のパートに就きたいという希望が高い。

→母親の就労希望に対して。就労したい人に、どんな職に就きたいか尋ねた。具体的には、4～6 時間のパートに就きたい。就労日数も、週 5 日ではなく、3～4 日というのが大多数の意見だという分析が出た。

・「親子でつきあえる地域の友人の有無」について。これは平成 21 年度と比べると、「つきあえる人がいない」が 2 倍程増加していることが少し気になる。小さいお子さんをお持ちの方が気軽に話ができるような人がいないことに、ショックを受けた。彼らは「子育ての楽しさと辛さ」についての設問で、「辛い」に該当するのだろうと考えた。そんなに増加していないというが、行政等がもっと仲介斡旋してあげても良いのではないか。また、結婚について 20 代～30 代対象の設問が、わが家はもう学生ではないが、30 歳になる息子がいる。「結婚するつもりはないわけではないが、35 歳までにすればいい」と言う。友人の中でも結婚が早い人もいるが、周囲を見ると割と遅めだ。30 歳を過ぎてから 35 歳までにすれば良いという考えを持っており、子どもは欲しいが、結婚年齢は年々上がってきている。アンケートを見て、そこにうちの息子も入っていると思った。

・私は働く立場から発言したい。アンケートの説明を受け、もし自分がこのアンケートに

参加したらどうかと考えた。「自分のことが好きである」「自分は愛されていると感じる」について。職場の人間関係を子どもに置き替えた場合、大人も子どもも、結局はコミュニケーションや愛だと思う。職場の中も全く同じだ。毎朝ミーティングから始めて、仕事に取りかかり、終業する。仕事のスタートから途中の連携で、最後にお疲れさまと言える職場の雰囲気生まれる。または家庭環境、親子の愛もこのようにつながっていると思う。ここでは分析が足りず表現はされていないが。大人子ども関わらず、この推移や結果にコミュニケーションや愛が表現されている。3つ子の魂 100 まで、と言うが、親子関係や家庭環境の中で醸成される。うちの子どもの教育の場合も、近所のおじさんおばさん、学校の先生、周囲の人との関わりがあった。地域社会がどれだけ個人の子どもの対して支援ができるか。本当は就労の問題も同じだと思っている。30代で悩んだあげく会社を辞める、上司とうまくいかずに会社を辞める、仕事は辛いことも多いが、どれだけうまく楽しい場に置き替えていけるか。職場の雰囲気を楽しい場に、学校のクラスの中を楽しい場に、家庭の中を楽しい場に、置き替えられた結果が、この数値に表れている。数値分析が足りず、主観的な部分もあるが、自分に置き替えたらどうだろうか。大人の社会も子どもの社会も原則は一緒だからこそ、どのようにすればいいかは同じだと思う。

・「母親の就労希望」について。子育てについては、専門的なことはわからないが、会議に参加して感じたことや得たものを労働観と連動させて、子どもが育てやすい社会にする働きを考えている。女性の就労については、女性の就労支援のために、子どもを犠牲にすることがあってはならない。だが、女性が働きたいか働きたくないか、当然希望はある。子育てをしながら自分が築いてきたキャリアを続けたい女性もいれば、とりあえず子どもが成長するまではパートタイムで良い女性もいる。就労の問題はどちらかという、経済状況から働かなければならず、仕事を続けたい方が多いのではないか。4～6時間くらいのパート勤め、週3日、4日で良いという方が多い。働く現場側から見ると、逆に今は働き手が足りない。働く場所はあるが、人が採れない。私は流通業にいるが、パートさんどころか全然人が採れない。そのくらい働く場所はある。ただ、何を優先するかは個人それぞれだ。就労希望者が70%超え、予想以上だった。皆、働きたいのだと実感した。結婚と出産についてだが、「結婚するつもりがない」という人、そして「子どもを持ちたいと思わない」という人が多く、これでは若者世代は結婚できないのは当然だ。結婚したいけどできない方が多いのは、収入の問題や非正規雇用の問題が大きく、それらが改善して始めて、たくさん子どもが育つ環境につながっていくと思う。

・もっと掘り下げた子どもの話でもよろしいか。実はとっても悲しい事があった。日野は地形的に恵まれており、馬を2頭飼って、子どもたちに馬を見せて、乗せる体験をさせていた。実際、馬にふれられる都内でも貴重な自治体だった。私はそれを誇りに思っており、子どもたちを馬に乗せた姿を撮影して、日野市の取り組みを自慢していた。ところが、残念なことに本日、体験に行った際、「これが最後になる」と言われた。市が面倒を見ることができなくなり、国立に行くという。どうしてそんなことをするのか、わからず、がっかりした。子どもたちが馬に乗ったり、えさをやったりすることはなかなかできる体験では

ない。動物園に行っても難しい。幼い頃の体験や思いは20歳過ぎても、はっきり覚えている。親子関係も大切だと思うが、保育園は、母親の役割を担っている。例えば水路でザリガニを見せてあげたり、自然にふれさせたり、子どもにできる限りの愛情を与えてあげたい。豊かな自然環境や、命にふれる場や機会はとても大切なことなので、なくなってしまうのは悲しい。あった方が良くはないか。中学生の話とずれてしまい、申し訳ない。ただ、全ては小さい頃からの、心からの愛につながるのだと思っている。

・中高生にもありのままの自分を受け入れてくれる場所が必要で、その1つが自由に遊べる冒険遊び場だ。世田谷区だけでも常設で4つ（※移動プレーパークも含めると7つ）もある。中高生がプレーパークで自分を見つけ直す。ありのままの自分を受け入れてもらえる場所の大切さは、中高生だけではなく、大人にとっても一緒だ。子育ての中で、親も受け入れてもらえる場所の重要性の話が出てくるが、逆にそうではない社会になってしまっている。場をどう作っていくかが大切だと思う。

・子育て支援は就労支援ではないというのも良くわかるし、私も基本はそうだと思う。しかし、就学前児童の母親70%が働きたいと言っている。前回調査に比べて減少したとはいえ、多くの女性が働きたいと思っている。私は、女性の活用という言葉だけがひとり歩きしているような、今の風潮に危機感を抱いている。総理大臣が国民に宣言して、働かなければいけない雰囲気を作って、年功序列をやめて成果主義に変わった時に、パートや短時間労働の女性が、どのように居場所を見つけるのか。その時、子育てはどうあるべきか。保育園では、働く母親に代わって、母親と同じくらい保育士さんたちが苦心しながらやっている。彼らの労働環境を良くする等についても一緒に考えていかないといけない。子育て支援だけではなくて、女性が働く環境の整備も大切だと感じている。NHKの番組で、子どもの貧困問題が採りあげられていた。6人に1人が貧困という事実、非常にショックを覚えた。前々から新聞等では見聞きしていたが、実際貧困状況に置かれたお子さん方が採りあげられ、差別あるいは差別というよりは自分で差別意識を感じてしまっているようだったが、他の子どもがやれることができず、ひきこもりになる。ひきこもりのお嬢さんが、豊島区のNPO法人が毎月2回、誰でも参加できる食堂に通って、手伝いをしている。母子家庭で、母親も一生懸命働くが経済的に豊かではなかった。そのお嬢さんも母親には言えないが、よく理解していて、NPOの作る居場所に行き、手伝いをして、一緒にご飯を食べて、小さい子たちに読み聞かせをしていた。大人も子ども関わらず、ありのままを受け入れてくれる居場所ということを考えて世の中を作っていくことが、結局、子どもを愛し、子どもが愛されて育つ環境づくりにつながるのではないかと。若干話が錯綜したが、これから少し整理しながら考えていきたい。

・保育園の先生が馬を返せて。親がこれでまとまる。親子でつきあえる地域の友人が80~90%になるよ。それも1つの手だ。小学校についてだが、学校に子どもが来てくれるようになるには、早寝、早起き、朝ごはん。日野市は、朝食摂取率が高い。9割以上が、朝ごはん食べさせている。学校に行った後は、学校が何とかしてくれる。子どもが学校に行けば、親と子の会話も生まれ、学校は家庭と話ができる。「何かあったら聞かせて」から

始める。そういう意味では日野市の家庭、母親たちは一生懸命やっていると、各校の校長も感じている。家庭があつての学校だ。子どもが元気に登校し、いつもお世話になる。

・視点が変わってしまい申し訳ないが、来年度「生活困窮者自立支援法」施行にあたり、健康福祉部でも新体制を検討している。その中の1メニューとして学習支援を考えている。これはアンケート調査の中で「自分のことが好きである」自己肯定観という話もあったが、最初からそこまでのステージとは言っていない。学習の場で、自己肯定できなくならないよう、学習の支援、生活習慣を身につけ、経験していけるようなことをやっていきたい。具体的な形態は今後、内部でも検討するが、環境づくりに関しては、健康福祉部でも取り組み、自分ではできるのだという自信を多くの子どもたちに持ってもらえる場を作っていきたい。

・子ども・子育て支援の「子ども」の規定について、恐らくその会議では保育園を中心にプレゼンしていたのではないかと。今、中高生や学童等、話が広がり過ぎた。次に出る計画のたたき台にそれらが入ってくるのか少し不安になった。保育園の園長と各官庁の役職を経験し、私にも息子が2人いる。委員の皆さんの言い分も方向性もわかる。問題はゆとり世代・さとり世代が就職し、結婚し、出産し、保護者になってきた時、どうするか。確実に次期計画に入ってくるが、保育園は彼らへの対応ができない。さとり世代の保育士さんは使えない。この先5年間で、保育園で死亡事故が起こるかもしれない。保育者の教育や指導をどのようにしていくか。先生の実践さんとタイアップする等対策を立てておかないと。これから小学校の先生方がさとり世代の次に何世代を作るかに期待するしかない。これから魔の10年がやってくる。今、委員の皆さんが議論しているのは、今の問題で、計画は未来の問題になる。なぜ就労しないのか。給料たくさん払っても、辞めてしまう。3月までがんばる人はいないし、本日辞めてしまう。現場の気持ちも会議に反映させてほしい。国にも行政の部課長に言ってもできない。人を配置して、お金を何とかしてくれと言っても、何とかできる人材がない。しかし、保護者や社会の要望はどんどん増えていく。0.7兆円の予算を取っても人口比で割ったら、子ども1人あたり、数万円だ。それで何ができるのかというのが、現場の気持ちだ。現場から見れば、5年10年先の保証はできない。保証ができる体制を組んでほしい。現場ができる現実的なプランを出してほしい。さもなければ、子育てはギブアップだ。親がギブアップなものは、施設もギブアップだ。それをわかってほしい。

・確かに保育人材が不足している。現在44万人の保育士が働いているが、新たに40万人の保育士を確保する必要がある。新しく保育士になる人材がどのくらいいるか。有資格者は4万人養成できるが、実際保育の仕事に就くのは1万人。実質的に保育士は増えない。日野市はこの間、500人の保育士を確保していかなければならない。なかなか難しい。また、建設業の人材不足で、保育園が建たないという現状も出てきている。相当がんばらないといけない。貧困問題については、対策をとっていかねばならない。保育と学童という大きなテーマがあり、これが子育て新制度の目玉となる。主に、確保策を数位的に示すことが、この会議の役割なのだが、それは前回お示ししたように、しっかり書きこんでいく。

ただ、貧困や子育てをどうしていくかは、本日お示しした中にもあるように、在宅で育てたいという意見もないがしろにできないので、理念に盛り込んで、もう少しふくらみのある計画にしていきたい。たくさんのご意見をちょうだいして本当に良かったと思っている。大幅に時間が過ぎしまい、申し訳ない。

会長 議題2に入らせていただく。事務局より説明。

事務局 ・「新！ひのっ子すくすくプラン」の骨子（案）ということで、これは前回の会議でお示しした内容に、若干変更がある。前回8章立てだったが、計画の位置づけや策定体制等を少しまとめて、全体で7章にさせていただいた。序章も少しコンパクトにした。

・3章の基本理念と基本目標（将来像）についてご意見をちょうだいし、そこも少し整理した形で今回、素案（抜粋版）を作った。「新！ひのっ子すくすくプラン素案（抜粋版）」をご覧いただきたい。P1「～今、求められている子育て支援とは～」で「1 止まらない人口減少と社会の変容」についてまとめている。

1) 急速な少子化の進行で、平成17年、合計特殊出生率が過去最低の1.26%まで落ち込んだ。現在、微増傾向に転じてはいるものの、依然低い水準だ。また、東京都における合計特殊出生率は、全国最低の1.09%だ。日野市は若干上昇傾向にはあるが、社会全体としてはそういう状況だ。2) 高齢化率の急激な上昇について。将来、4割弱が高齢者になると、社会自体の成立が懸念されている。3) 女性の社会進出と子育て（ワーク・ライフ・バランス）について。アベノミクス3本の矢「成長戦略」として、「女性が輝く日本」と題して、「女性の社会進出」が重要課題として挙げられている。女性が安心して家庭と仕事を両立できる仕組み、社会のあらゆる分野における構成員がそれぞれ役割を果たし、相互協力することが必要だという中での子育て支援。

・P2「2 子どもや親をとりまく環境の変化」について。1) 家族の形の変化について。晩婚化の傾向、一人っ子世帯の増加が挙げられる。また、女性の社会進出も加速している。そのような中、親と子がふれあう時間が減ってきている。

2) 子どものあり様の変化について。家族の形の変化に伴って、子どもが多様な経験をする機会が減少しているのではないかと。また、早期に対応が必要になる子どもも増加している状況だ。3) 育児に不安を抱える親の増加について。アンケートの結果でもあったが、相談相手が身近に少ない。親が孤立化する傾向がみられる。また児童虐待の深刻な問題も増加しているのではないかと。4) 多様化する社会と家庭の責任について。多様な価値観にこたえていく柔軟な対応が求められていく。

・P3「3 家庭の子育て力回復と地域の支え」について。1) 家庭での子育て力の回復について。教育力の低下が言われ続けているが、どうアプローチしていくかが大切だ。その上で、2) 地域で子育てを支えることに、核家族化した現代の家族の形、その中で親を支えるための仕組みづくりというのが重要だ。市民の

力や地域の力がますます重要になってくる。また、特別な支援を要する子どもたちが増えてきている。その子どもたちも社会の構成員として共に育っていく、そういう社会でなければならない。また、児童虐待の問題についても学校、関係機関と連携して保護者と子どもを支えていく体制が求められている。

・P4「4 福祉と教育の連携強化」について。1) 待機児解消と子育て支援については、今後の取り組みでがんばっていく。2) 地域の子育て支援の充実について。多様なニーズに合わせた地域の子育て支援の充実が求められている。3) 一人一人の生きる力と自己肯定観を育む教育活動の推進について。自然活動とその他の活動を通して、子どもたちがのびのびと自らの個性を發揮しながら、「生きる力」を身につけていくことが求められている。ニーズ調査の結果、自己肯定観は、全体としては前回より上がっているが、やはり低い傾向は否めない。自己肯定観を持って育つ環境づくりが求められている。4) 学校・家庭・地域社会と連携した教育の充実について。学校を中心に、家庭、地域の教育の充実を図るとともに、相互の連携を推進していくことが今求められている。

・P5「第1章 計画の策定にあたって」について。「計画策定の背景」についてはもう既にご説明申し上げた。少子化の傾向に歯止めがかからない、待機児童がなくなるといった様々な課題解決を目的とし、平成24年、子ども・子育て支援法が施行された。支援法で、子ども・子育て計画の策定が市町村に義務付けられることとなった。「新!ひのっ子すくすくプラン」は、現行の「すくすくプラン」を継承しつつ、さらに充実、発展させていく。日野市で子育てをしたくなる、子育てに希望が持てるような、子育てしたいまちを実現するための計画となる。

・P6「2 計画の位置づけ」についてはそれぞれ各法律に基づく、各計画を含む形の計画となる。図で示したような形だ。

・P7「3 計画の期間と対象」については、平成27年～31年の5か年とさせていただく。「4 計画の策定体制」については、本支援会議において、市民と行政とが共同で計画の策定を図っていくというところ。

・P8「5 子ども・子育て支援会議委員意見」は、前回、委員の皆さまからちようだいしたご意見の中から、いくつか言葉を拾いあげてみた。親、子、次世代、地域というくくりの中に少し入れ込んでいる。また、本日いただいたご意見もさらにここに入れ込んで、肉付けして、反映していきたいと思っている。

・「第3章 基本理念と基本目標」について。「1 基本理念（あるべき姿についての基本的考え）」ということで、「子どもを育て・子どもと育つ 寄り添う地域・あふれる笑顔」というところになる。1) 親育ち、2) 子育ち、3) 地域育ち、4) 次世代育ち。親育ちについては、子どもに向き合う機会が増える一方で、子どもに向き合わなければならないというプレッシャーを抱えている。親として成長していく環境を社会全体で支える仕組みが必要だ。子育ちについては、それぞれ成長の発達段階において、各ステージに合わせた適切な関わりが重要だ。子ど

も一人一人が発達段階に応じた支援を受けられる環境を整えていくことが重要だ。地域育では、希薄化する地域のつながりに対しての働きかけだ。地域社会そのものが子育て中の保護者の気持ちを受け止めつつ、保護者の不安や負担を和らげ、保護者が自己肯定観を持って子育てに関わっていけるような地域を目指す。次世代育では、体験活動の機会の減少、発達の段階の個人差がある中で、異年齢や多様な人とふれあい、人権意識を学ぶ機会を設けることで、自他への思いやりの心を育てていくことを大切にする。

・「新！ひのっ子すくすくプラン概要図案」をご覧ください。子育て、親育ち、次世代育、地域育が人の成長の段階に合わせ、どんなイメージになるのか、図で示したものだ。「2 基本目標（将来像）」について、それぞれの部分でキーワードを記載している。親育ちの点線で囲んだ部分だが、様々な背景や課題を抱えた家庭への支援については、少し新しく内容を追加している。虐待やDV、一人親について加筆した。P33「第4章 施策の体系と重点的な取り組み」というところだ。A3横で閉じ込んである。「新！ひのっ子すくすくプランの体系」について。理念は先ほど申し上げた。その下の将来像について、親が育つから次世代を育てるという階層で表現した。方針について、少しトーンがかかっているが、10項目ある。各将来像に対する具体的な方針になる。さらに右側に、29の施策の方向を示している。P40「第5章 個別施策の展開」でそれぞれの方針、施策の展開にぶら下がる事業として全体で154記載している。主なものを説明する。

・P40、全て通しのページになるが、ご了承ください。まず、方針1) 多様なニーズを受け止められる子育て支援、施策の方向(1) 多様な保育の場づくりで、③小規模保育、④家庭的保育、これらは新制度に伴い入ってきた部分、既存の事業になかったが、追加されている部分になる。(2) 保育の質の向上の④保育士の研修等、こちらを追加している。P49、施策の方向(2) 子育て相談の充実で、⑤利用者支援事業、⑥相談支援事業も追加した。P56、施策の方向(1) 子育て世帯への経済的支援の部分で、⑤就学援助、⑥奨学金でこちらも既存の事業ではあるが、現行計画でなかった部分を追加した。P61、施策の方向(3) ひとり親家庭の自立に向けた支援になる。⑩学習支援、先ほど健康福祉部長からも話があったが、生活困窮者自立支援法に関連した日野市の取り組みとして、今後続ける学習支援の部分に掲載している。施策の方向(4) 不登校・ひきこもりの子への支援という部分で、④学校登校支援、⑤スクールソーシャルワーカーという部分で、これも従来からある支援の充実として掲載した。P74、施策の方向(1) 心の健康を守る支援の充実、エールの関係で新たに⑥専門指導事業、⑦幼児グループ事業、⑧児童発達支援事業を追加した。

・P86、方針2) 安心して子育てができる安全なまちづくりの中で施策の方向性(1) 安全、安心なまちづくりの推進②学校防犯カメラについて、こちらも進めている。これは新たな事業ということで、教育委員会を中心にして、関係部署と

	<p>今、検討している。通学路の防犯カメラということで、お聞きになった方もいると思うが、そのような事業も追加している。少し駆け足での説明になったが、今、素案の抜粋として、基本理念、それに基づく施策の展開、事業の方向性について説明した。これにさらにこれまでお示した子育て支援の量の見込み、確保方策の部分、最後に実現に向けこの計画をどう進めていくか、具体的な部分を記述した形で最後、素案としてまとめさせていただく予定だ。最後に、今説明させていただいた各個別事業だが、行政内部で現状の事業の課題と方向性を各関係部署に挙げていただき、まとめていく。先ほど、各委員の方から、ニーズ調査に関わる内容で、たくさんご意見ちょうだいした。それらも盛り込んでいきたい。愛着形成の重要性、親の自立、いじめが意外に少ないこと、自己肯定感の重要性について等があった。また親の気持ちを伝えていくことも大切だ。子ども・子育て支援は就労支援ではないが、一方で母親の就労希望も70%ある。ワーク・ライフ・バランスの話もあった。友人関係の希薄化については、行政サービスのPR、利用者支援につながってくる。晩婚化と、結婚と収入と非正規雇用、子どもを増やしていくためには大切な問題だ。後はプランの体系も重要。それぞれうまく盛り込んでいけたらと思っている。</p>
	<p>委員の主な質問・ご意見等</p>
	<p>・スケジュールについて、少しご説明させていただく。「新！ひのっ子すくすくプラン」のご説明があった。この部分を10月末までに形にし、委員の皆さんに配布させていただく。11月の会議に向けて、意見をお願いする予定だ。パブリックコメントについてだが、この計画について、12月中もしくはもっと後でパブリックコメントを実施し、1月の支援会議でパブリックコメントのまとめを行う。3月には計画自体が完成する、という流れで進めさせていただく。</p>
	<p>・第3章基本理念と基本目標の部分だが、親育ち、子育て、地域づくり、次世代育てについて、非常に言いにくく、地域育ちという部分もあったので、「ち」で統一しても良いのではないかと。我々も理念やコンセプトを非常に大切にしている。言いやすい言い回し、そろえたり、覚えやすかったり、忘れないというのが大切だ。A3資料では「共にいき」が、P31では「共に生き」という漢字を使っている。こちらの方がわかりやすいのではないかと。お互いに助け合って生きていく、という漢字を使った方が、コンセプトがわかりやすい。キャッチコピーだが、「一人ひとり」と漢字とひらがなで記載するのはわかるが、その後の「輝く」は、私は語尾を上げるためにも「輝き」主体、「き」の方が、映えると思う。基本コンセプトはこれでいいと思う。言い回しは、覚えやすい忘れにくいものという提案だ。市民に読みやすい、覚えやすい、忘れにくい、これを、参考にさせていただければ。</p>
	<p>・理念の順番について。前回の「すくすくプラン」には、私も関わらせていただいた。親育ち子育ては、しっくりきていたのだが、国の向く方向が、本当に子どもを中心にしているのかと、疑問と危機感を抱き始めている。やはり基本理念の順番は、親が一番ではなく、子どもを一番に持ってきて、子どものことは子どもを中心に考えていく、子どもを中心に</p>

計画、施策を考えていくことを打ち出すのが大切なのではないか。また、序章だが、P 2、P 3、家庭の責任や家庭の子育て力回復、地域の支え、確かにその通りだと思うが、家庭もそうだが、地域も育てるとあるが、ではそういう社会を作ってしまった社会の責任はどうか。家庭の子育て力が叫ばれているが、地域の子どもや子育て世代に対する受容力が昔より減っているのではないか。どれだけ受け入れているのか。やはり地域の子どもや子育て世代への受容力が高まることで、本当に子育てしやすいまちになるし、子どもがいきいき過ごせるまちになるのではないか。地域も子どもたちを支え、受容力を高めていくということをもっと謳っていただき、プランを推進していただきたい。そういう地域こそ作っていききたい。

・「新！ひのっ子すくすくプラン」概念図について、左側の図で、子育てが上になるのが良いと思う。バランス的に、親育ち、子育ちとなるが、整合性があつた方が良いのではないか。昨年色々お話を伺う中で、子どもの問題は親の責任や親の愛で、成り立つ。親育ちは一番大切だという矛盾した考え方、感じ方もない訳ではない。これで良いのか。X軸に子ども、家庭、地域と、Y軸に子ども、右に上がっていく。子ども中心という考え方から見れば、子育ちは一番上で適切だという感じはする。理屈を色々考えると整合性とれない。

→子ども・子育て支援法の60条で、基本構造が位置づけられているが、その中から少し抜粋して読ませていただく。子ども・子育て支援法を始めとする関係法律において明記されている通り、父母、その他の保護者は、子育てについての第一義的責任を有するという基本認識を前提とし、また、家庭は教育の原点であり、出発点であるとの認識のもと、子ども・子育てを巡る関係を踏まえ、子ども・子育て支援は進められる必要がある。子育てとは本来、子どもに限りない愛情を注ぎ、その存在に感謝し、日々成長する子どもの姿に感動して、親も親として成長していくという大きな喜びを見いだす貴い行為である。したがって、子ども・子育て支援とは、保護者の育児を肩代わりするものではなく、保護者が子育てについての責任を果たすことや子育ての権利を享受することが可能となるよう、地域や社会が保護者に寄り添い、子育てに対する不安や負担、孤立感を和らげることを通じて、保護者が自己肯定観を持ちながら、子どもと向き合える環境を整え、親としての成長を支援し、子育てを通しての成長に、喜びや生きがいを感じられることができるような支援をしていく。というようなくだりがある。その辺りを踏まえて、第一義的責任という部分でまず親、そして子どもが育ち、地域がそれを支えていくというような並びで良いのかと思う。

・今、法律のことを教えていただき、こういう法律があることは知っていたが、60条の記載内容については知らなかった。お読みいただき、ありがとうございます。法律ではそのように記載されているが、これは「新！ひのっ子すくすくプラン」なので、やはり私は、子どもがまず中心にあると思う。もちろん親はそれを担い、楽しさを享受し、第一義的な責任があることはわかるが、それを推進するプランではなく、ここにも記載されているが「一人一人輝き、主体的でたくましい子育て、子育ち」を題目とすれば、子どもを一番上に置いた方が、良いと思う。

・個人的な疑問だが、少子化で子どもが減っているのに、P 2、「7 子どものあり様の変化で、ADHD「気になる子ども」が増加していると記載がある。これはどういうことか。ADHD「気になる子ども」たちへの支援で、P31 の基本目標、様々な背景を抱えた子どもの家庭への支援、になるのであれば、P61 では、どの事業に該当するのか。P74、子どもの心と体の健やかな成長を支える、のどこかに入るのか。虐待への取り組みや一人親、不登校、ひきこもりで、この「気になる子」はどこに属するのか。

→いわゆる「気になる子ども」は、ADHDという表現もあり、学問的には、まだ今後変わっていく部分もあるが、今回は「気になる子ども」という表現で通したい。少し前の数字だが、文部科学省が、そのような趣旨で行った調査結果がある。数字的には6.3%いると発表されている。ただ、「気になる子ども」なので、人によって価値観も考え方も変わるので、潜在的には10%くらいいる。1クラス40人であれば、数人くらいいるのではないか。今年の4月に旭が丘に「発達・教育支援センター・エール」という施設ができた。中心は未就学の児童の支援だ。心の健康を守るというところの⑥⑦⑧、次のP74の。直接的にお子さんに対する支援という感じになる。また、母親、親御さんに対しての相談支援は1の柱のところに入っている。具体的には、P49(2)⑥相談支援事業。さらに、教育委員会としての取り組みとして、P61(4)不登校、ひきこもりの子への支援がある。④学校登校支援と⑤スクールソーシャルワーカー。スクールソーシャルワーカーは新規事業としてで、今年度から始まった。

・「気になる子ども」は、仕事をする中で聞いてはいたが、保育園よりは学童、小学校に上がって、少し社会性が付いてきて、社会的なルールから少し外れる傾向の生徒が気になるようになったのではないか。保育園の時はやんちゃで少し私の強い子でしかなかったが、学童や小学校に上がった途端、浮いてしまって、「気になる子ども」のくくりに入ってしまう。親の立場からすると、保育園入園時は特に何でもなかった。先生方も気にしてはいるかもしれないが、面談等でも言われない。小学校に上がり、しばらく経つと、「気になる子ども」という雰囲気が出てくる。親自身も子どもが小学校に入って突然、考えもしなかった現実を突きつけられる。心配し、不安になる母親たちがすごく目に付いた。そういう印象を受けた。これから先も増えていくのではないか。クラスに1割はいるというが、どう対処していくのか。

・スクールカウンセラーやソーシャルワーカーへの相談、事業を実施していく中で、学校の先生と検討していく。家庭問題等で保育園にも「気になる子ども」はいる。そういう子を事業フォローしていくということか。

→この分野においては、発達障害と言われる方々に対し、発達に遅れや偏りがあるという表現を使う。見た目では特にわからないが、個性や特徴を強く持っている。日野市においても「発達教育・支援センター・エール」開設に伴って、正職員として臨床心理士を雇用している。各巡回支援、相談等を行っているが、やはり早い気づきと継続した支援が非常に重要になる。需要という言葉をもし使うのであれば、先生からは何も言われないが、自分のお子さんもしくは他人のお子さんが、専門家から見てある個性や特性を強く持ってい

<p>ることがわかり、早いうちに気づきを得て、発達の段階でできるサポートをしていくことが重要になる。また、小学校期、学齢期では遅いとも言われている。早い気づきと継続したサポートが一番重要な事業になっている。</p>
<p>・親の立場から言うと、基本的に、学校に上がる前、保育園側から指摘されることはない。明らかに障害を持っているという以外は言われることはない。そのまま小学校に入学して始めて宣告される。結局、親はどこから気がつけば良いのか。</p>
<p>→全てのお子さんに対して、ケアができるかという、なかなか難しい。私も専門職ではないのでわからないが、親御さんに言い出しづらかったり、判断ができないケースもある。</p>
<p>・現場は子どもに夢を抱いている。希望を持っている。子どもに夢と希望を持って保育をしている。学校の先生が夢と希望を持っていないかは知らない。子どもにバツ印を出したくないというのが、保母さんの全て。どう親と向き合っていくかが問題だ。「うちの子に何を言うのか」「先生と一緒に乗り越えていこう、言ってくれた」という問題になる。職員は夢と希望を持ってやっている。その先は専門家の世界で、我々は違う。ただ、夢を持っている。まだ5～6歳の子どもの夢を捨てたくない。</p>
<p>・P74、施策の方向の事業1の部分だが、保育園がやっているのに入っていない。多分誤解もあると思う。我々の園ではエールから委託を受けて、親や先生が専門家に「気になる子ども」や暮らしにくいお子さんに対して、どこに困り感があるのかを聞いてもらい、見てもらい、どうやったら生活や保育の中で、解消できるのかについて、取り組んでいる。どうしても母親方に早期支援が必要な場合は、個別相談を進めている。もう8年も継続している取り組みだ。</p>
<p>・保育園も若干変わっている。</p>
<p>・結論を言うと、バツ印を付けないために、早くからそういうことに取り組むんだ。</p>
<p>・だから、そういう体制ができています。そうかといって、小学校でできないと、先生によって偏りが出てきてしまう。統制できない部分もあるので、子どもにあった場面であれば。</p>
<p>・それは専門家がいる。遅くなればなるほど、偏りの開きが出る。保育園でも行うケースがある。それなりの保育士であれば、ちょっとした相談を受けたり、専門家による個別相談もある。そこまでなっていないければ、大した問題ではないということだ。</p>
<p>・計画書に挙げている以上、ケアやフォローをしていることをここに記載すべきではないか。</p>
<p>・ADHDを取ればよいのではないか。言葉として出してしまっている以上、日野市がどう支援していくか、これから子どもを育てていく親が安心して子育てできるように、どうしていくのか記載すべきだ。ここには増加していると記載されるだけだ。</p>
<p>・でもそれは大きくくくれば、発達障害なんだ。大きく心理学でくくれば、発達の問題は障害の相談で行うのだ。</p>
<p>・ADHD。「発達教育・障害支援センター・エール」で行っている事業展開がまだ入り込んでいないんだ。</p>
<p>→まだ序章なので、そこまで詳細には記載していない。後段にこれから説明が入ってくる。</p>

<p>後段に入ってくるキーワードが序章に入っていると認識いただければ。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・あの基本理念については、先ほど、今回のキーワードが、主体者が親だということ、あと権利を何よりも大切さについて、私自身が子どもの意思の尊重や自己決定権は非常に大切だと思うが。
<ul style="list-style-type: none"> ・法律の問題等、色々あるが、意見を聞いた上で、事務局側でまとめる際に、ご勘案いただけるかどうか。今までも議論はあったが、どうなっているのか。
<p>→2番目に置いてあるから子どもが2番目だという意味ではない。私自身の感覚では、子どもは1人では育たない。やはり一番頼りにしているのは、親である。成長に応じて保育園や幼稚園、小学校、地域と関わってくる。子どもは主人公ではあるが、まず家族、親、というくりにしていくのは、順序の問題ではない。子育てに第一義的責任を持っている親がまず先にあって、そこにバックアップが入ってくるという視点もある。また次回にでもお考えいただきたい。子どもが2番目という考え方がベースにある訳ではないということをお伝えおきたい。</p>
<p>→基本方針、子ども・子育て支援法60条に基づく基本方針を少し抜粋させていただき、読み上げた。その後続く文章があるが。「こういう支援によって、より良い親子関係を形成していくことは子どものより良い育ちを助けることに他ならない。子どもの最善の利益を実現するために」というくだりが続いていく。そういった流れも少し踏まえている。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・理念をもう一度読み直すと、理念は子どもと育つ子ども、これはまさに親が主人公だ。それで良いのか。もう少し全体を見ていただきたい。「子どもが育ち、子どもと育ち、寄り添う地域、あふれる笑顔」であれば、良いと思う。
<ul style="list-style-type: none"> ・一言だけ言わせて欲しい。先ほど「ち」と「て」の差で、全く表現が違ってくると申し上げた。コンセプト次第で、理念が大きく変わる。もう一言だけ言わせていただくと、理念の順番はこれで良い。
<ul style="list-style-type: none"> ・主体・対象は子どもだが、子どもを育てるにはどうアプローチしたら良いか。ただし書きを記載すれば、理解の助けになる。社会の問題、親の問題、子どもの問題と語っていくと、最終的には家庭の問題に帰結する。結論ははっきりとは言えないので、ちょうどいしたご意見をどのような形で反映していくか。また次回にお願いする。その他の事項として、何か報告があれば、簡潔にお願いする。
<p>→1点目が専門部会で検討していただいた基準の条例だ。9月の定例会で可決されたことを報告する。それから、昨日、子ども・子育て支援の市民向け説明会を開催した。15時～、18時30分～、の2回開催し、概ね47名がご参加された。内容については、要点録としてホームページに上げるので、よろしければご覧いただきたい。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・次回日程 平成26年11月27日(木) 18:30～